

第2回びわこ文化公園都市将来ビジョン検討委員会 議事概要

- 日 時 平成23年10月21日（金） 15:00～17:15
- 場 所 滋賀県大津合同庁舎7-A会議室
- 出席委員 奥村委員 佐藤委員 多胡委員 塚口委員 東野委員 林田委員 原山委員
平田委員 村山委員 脇田委員

■ 議 事

- (1) 当地域の利用状況、特性、アンケート・意向調査結果について
- (2) 当地域の課題と将来像について（各委員スピーチ）
- (3) 意見交換

■ 議事概要

1. 議事

(1) 当地域の利用状況、特性、アンケート・意向調査結果について

（資料1～4、参考資料について事務局より説明）

委員長：今の資料説明についてのご質問、あるいは、データの解釈の仕方等についてご意見のある方は、お願いしたい。現時点では、このようなまとめ方でよいだろう。

それでは、特にご意見もないようなので、この後の委員の皆さんのご発言の中で、このような客観的なデータを参照するというので、次の議事に進みたい。

(2) 当地域の課題と将来像について（各委員スピーチ）

委員長：二つ目の議事として、委員の皆さんから、びわこ文化公園都市の課題と将来像について、お話いただくということで、各自5～6分のスピーチをお願いしている。皆さんのご発言が終わった後、一括して、相互に意見交換を行いたい。スピーチの順番は、席順に沿ってお願いしたい。

委員：滋賀医科大学からの要望ということで、私自身の意見も含め、学内の役員からの情報を取りまとめた。まず、本地域への公共交通手段については、アンケートにもあったように、瀬田駅と南草津駅からのバスに頼っているという現状があり、それ以外はマイカーを利用している。かつては、モノレールの設置という議論があったようだが、公共交通の便が悪いという点が課題である。

次に、本学の学生として、1日当たり1,000名、患者としては1,800人が来ており、東大津高生や図書館、美術館の利用者などを含めると、文化ゾーンには多くの人出入りがある。本学の看護学科の学生寮や社宅などもあるが、ショッピングセンター等が全く無く、また、特に若い女性にとっては、街灯が無く、物騒な地域になっている。

また、患者の観点からいうと、本院の前に薬局がないため、院内で薬を出している現状があるが、医薬分業の点から、出来るだけ院外処方を行う必要がある。土地利用上の規制はあるが、本院の前に薬局を誘致していただけないかと考えている。

また、住居施設がほとんどないという点も課題である。本学の学生、研修医、看護師向けの住居が不足しているが、青山地区に家を買うことは困難である。本地域に、住宅施設が整備されると利便性が向上すると考える。

次に、本学の要望をとりまとめた結果、特に研究に関して、次のような提案を行いたい。本学では、京大の山中教授との共同研究である iPS 細胞の研究や、最近話題になったイグノーベル賞を取った研究、睡眠治療など、様々な研究に取り組んでいるが、びわこ文化公園都市を活用した研究開発の拠点化という観点から、「知のリサイクルライフイノベーション推進ゾーン設立による琵琶湖南部丘陵地域開発活性化」が大きなテーマであると考え。先日より、奥村文部科学副大臣とも、この地域における研究開発拠点としての活性化について議論を行っているところであり、本日も、その際の資料の内容を盛り込んでいる。

「医工連携ものづくりネットワークのグローバル拠点化推進」について、立命館大学、龍谷大学、県内の企業、滋賀県とも連携して取り組んできている中で、特に「震災にも強い災害時自己完結型ゾーン」を構築しながら、「グリーンイノベーション型研究施設」を意識しつつ、一体型の研究開発拠点がつくれないかと考えている。

具体的には、MR画像技術のシステム開発で培った成果をベースにして、最新鋭のMR技術を導入し、GE等の世界的企業とも連携して、システム開発拠点をつくりたいと考える。また精神医療や脳疾患治療、生活習慣病治療など、研究開発の分野を拡大していくことも考えられる。

また、単なる研究開発拠点としてだけでなく、専門職員の教育を行うトレーニングセンターとしていくことも重要である。患者にも臨床研究に関わっていただき、あるいは被験者としてネットワークを構築していくことも考えられる。

健康、福祉のグリーンイノベーション案としては、森林浴などを考慮するとともに、廃棄物の自己処理を合わせ持つ施設の導入などが考えられる。実現にあたっては、滋賀医科大学、立命館大学、龍谷大学や、有志企業にも参画していただき、連携して研究を進めていきたいと考える。

また、災害時のレスキューゾーンとしては、滋賀医大附属病院が県の災害拠点病院となっていることもあり、自己完結型の廃棄物処理なども含めて、さらに充実していくことが考えられる。

委員：私ども龍谷大学瀬田キャンパスとしては、先ほどの村山委員の発言と同様、交通アクセスが最大の課題である。これは、開設以来の課題であるが、今回は、びわこ文化公園都市としての課題について述べたい。

まず、当初計画案として、クラスターが提示されているが、個別施設としての機能は果たされていると思うが、エリア全体としてのコントロール、全体に対しての配慮、ないし制約がみられないという点が課題としてあげられる。その結果、各クラスターにおいても、相互の連携が少なくなっていると考えられる。

さらに、立命館大学びわこ・くさつキャンパスの開設により、全体の整合性が取れなくなっている。また、住宅地区についても、文化クラスターとしての意味がみえず、単に宅地開発を行ったに過ぎない。当初の計画と現状との乖離が生じており、そこを見直

すことが必要である。

2番目に、本学独自の課題として、本学は、エリアの西の端に位置しており、唯一、瀬田駅からのバスによるアクセスがあるが、エリア全体からは孤立した状態となっている。また、保安林と残地森林に囲まれ、これ以上の展開が見込めない状態である。また、本校の西側の隣接地を購入しているが、計画地域に入っていないため、一体的な開発ができなくなっている。エリアの線引きを再検討することにより、隣接地を組み入れて、一体的な開発を行っていく必要があると考える。

3番目に、新たなビジョン策定に向けた提言として、まず、立命館大学びわこ・くさつキャンパスを計画範囲に組み込むのであれば、本学の西側隣接地も範囲に組み込む必要があると考える。また、全体のゾーニングを見直すことも必要である。用途の設定と実態が合っていないため、今までの経過を踏まえつつ、実現可能性を考慮して、ゾーニングを検証する必要がある。

また、先ほども、モノレールの話があったが、地域を東西に貫通する交通がないという課題がある。東西に貫通する道路等について、財政上の見直しを含めた検討が必要である。

また、計画的に施設整備を進めていくためのマネジメント体制の整備も重要である。誰がどのようにマネジメントを行っていくか、その体制を明確にする必要がある。本地域は、様々な点で可能性のある地域と認識しているが、体系的に整備を進めていくためのマネジメントの仕組みは重要な課題であると考えられる。

委員：大津市における、びわこ文化公園都市の位置づけとしては、総合計画の基本計画の中で、「研究、教育、文化機能や新産業創出機能などの集積を図るゾーン」として位置づけている。また、都市計画マスタープランでも、地域別構想において、「瀬田駅の周辺地域を中心とする学術・文化機能の高い職住遊の調和した市街地の形成」をまちづくりのコンセプトとしている。

実際の市民生活の中で、びわこ文化公園都市とはどういうものなのかというと、県立近代美術館、県立図書館、龍谷大学などが立地しており、特に県立図書館があることによって、市民要望の大きな部分がまかなわれていると思う。また、滋賀医大附属病院や龍谷大学があることも、市民生活に大きく貢献しており、大津市にとって、ありがたい地域であるといえる。この地域に関する市民要望としては、特にバスによるアクセスに関する改善という点があげられる。

今後については、特に自然との調和に配慮しながら、さらに機能の充実を図っていけるような将来構想をお願いしたい。また、瀬田駅周辺や石山駅周辺との有機的な連携を強化しながら、相互の都市機能の向上を目指していただきたいと考えている。

また、滋賀県に対する本市からの質問になるが、本市からの要望として、「びわ湖緑のイノベーション拠点づくり」に向けた早期の進展を求めてきたが、これに関しても、別の機会でもよいので、お答えいただければと思う。また、産業クラスターの形成中核拠点の整備に関して、早期の進展をお願いしたいと思う。

大津市では、産業活性化につながる企業立地の適地が不足しており、インキュベーション施設を卒業する企業が進出できるような拠点づくりが求められている。また、太陽

光発電等の新エネルギー創出の施設建設の候補地としても可能性があるのではないかと考えている。

委員：行政の中で、今、一番課題になっていることとして、行政サービスというものが従来の枠組みのまま、存続していけるかという点がある。市役所が住民に様々なサービスをするという時代があったわけだが、これからは変わっていくと感じている。私たちのこれまでのミッションは、「最大多数の最大幸福」ということで、右肩上がり前提として、色々なことをしてきたが、これからは、「持続可能な地域社会」が目標となり、その中でも、自然環境を含めた環境、経済的な自立、社会的な仕組みをどうつくるかが求められている。

これからは、右肩上がりの開発整備と合わせたソフト施策という時代ではないと考えている。しかし、今までのサービスをどう維持するかということも重要なので、このエリアでは何ができるのかということ、このエリアの役割といった点を再確認することが重要である。

また、大学の役割として、法人市民としての役割も重要な観点である。そして、東日本大震災以降の地域開発という点も重要であり、災害時のこのエリアの役割について考えていく必要がある。さらに、「まち」としての意味、生活感という点も考える必要がある。

目指すべきエリア像については、文化公園都市としての質感を維持することが大切だと思う。さらに上乘せして、色々なことをやっていくというよりも、どのように良さを維持し、機能や魅力を付加していくか、という点が重要である。それが、最も実現性のある議論ではないかと思う。また、エリアマネジメントに関する意見も出たが、やはりトータルデザイン、あるいは市民、県民の意見に基づいたコミュニティ・デザインの考え方も踏まえる必要がある。

また、地域力、県民力、行政力を発揮するためには、ロール（役割）、ルール（約束事）、ツール（手段）の考え方が重要であり、これらを明確にして、県民と共有する必要がある。

次に、現在の公的施設等の集積にプラスアルファして、どのようなまちにしていくか、についてだが、一つは魅力をどのように付加するかということ、これには、民の力の導入が重要だと思う。また、連携の場として、県と2市の連携を何らかの形で示すという点も必要である。また、教育の場として、各大学の学生がここで何を学ぶのかということ、そして、県民活動の場として、県民・市民のコミュニティの力という視点も重要である。

具体的なイメージとしては、まず、魅力の場として活かし方として、コンビニやオープンカフェなど、緑の中に民の機能を導入することが考えられる。また、連携の場としては、風景・景観の調和に向けて、各種施設の建替えなどに関する共通のルールが必要である。交通アクセスについては、LRT 等も含めて、新交通に関する議論も求められると思う。教育の場としては、大学生の地域の学びという視点から、例えば、里山保全の環境教育や福祉施設との連携による福祉教育、大学による身近な地域貢献などが考えられる。県民活動の場としては、県民ファンドによる里山などの維持管理や「新しい公共」

の考え方によるコミュニティ・ビジネスなどの展開が考えられないだろうか。

今ある良さを、どのように維持していくかについては、県にとっても、大津市、草津市にとっても重要な課題であり、これまで整備していききた各種機能をサービスし続けていく仕組みも含めて、考えていく必要がある。

委員；私は、兵庫県の淡路から来ているのだが、近畿は大阪と京都だけではないと考えており、それ以外の地域から、直接海外にわが国のいいところを発信するというのを考えている。現地を見てきたのだが、周辺も含めて、非常に良い資源があるエリアだと感じた。そこで、「Cool Japan, of common people, common life」、つまり普通の人が生生活の中で育ててきたものを、世界に発信していくことができるのではないかと考えた。こうした庶民の生活の質の高さは、アジアを含めた海外から、今もなお、憧れの対象となるものである。

この地域の資源として、まず、「Academic Complex」、つまり、各大学のキャンパスや県立の各種施設が立地し、多くの海外留学生や研究者がいることが挙げられる。

次に、「Reliable Medical Complex and Heart-warming Social Welfare Complex」、大学病院をはじめ、福祉関係の施設も立地しており、うまく連携すれば海外の人もうらやむ医療・福祉体制が可能となると考えられる。また、韓国でも、メディカルツーリズムを日本に売り込もうとしているが、こうした点でも、このエリアは可能性のある地域である。

「High Quality Rural Life with Nature」、これは、自然と調和した田園の生活があるということ、立派な農家や田んぼ、田園風景が残っているということである。このような「豊かな農村」は、大きな魅力であり、東アジアの中でも貴重なものである。

「Historic Landscape」、この地域では、周辺に、旧東海道のまちなみが残っており、これも大きな資源である。

「High Technology for High Quality of Our Life」、普段の生活に密着したハイテクがあるということ。電気炊飯器は、中国の観光客に人気のみやげになっているが、この周辺のパナソニックの工場でも、電気炊飯器が製造されている。パナソニックでは、環境教育活動としてファクトリーツアーも行っており、こうした工場の存在は、産業ツーリズムの資源にもなる。

「Smart New Town and People with Warm Heart and Hospitality」、青山や桜ヶ丘などのハイレベルなニュータウンがあり、意識の高い住民が住んでいるということも資源のひとつである。

「Sports, Culture and Entertainment」、県立アイスアリーナ、県立図書館などのスポーツ、文化施設が集積していることも大きな資源である。

これらの資源の良さ、魅力は、地元の人には当たり前のもので、よそ者の評価があつて、初めて地元の人には良さに気付く。こうした資源に対する評価が、地元の人々の愛着を育て、それが地域づくり活動の原動力になる。

次に、これらの資源を生かしたまちづくり・地域づくりの進め方であるが、この地域は、必ずしも、大阪や京都にだけ顔を向けるべき場所ではないと考える。アジア諸国をはじめとした海外に向けて、庶民の生活の良さを発信していくという視点が重要である。

これからのまちづくり・地域づくりに向けた行動計画としては、まず、資源抽出の活動を行い、それにより、この地域の普通の生活の良さを売り込むという気持ちを醸成していくこと、また、地域住民と留学生との交流をきっかけとして「オープンマインド意識」の定着を図っていくことなどが考えられる。地域内の海外の人を大事にして、地域の良さを紹介し、評価してもらうことにより、地域の人自身が資源を再評価していくことが期待される。例えば、住宅地の中にホストハウスをつくる、農村地域でもホストファミリーを募集する、留学生センターをつくって交流するといったことが考えられる。

また、外部滞在者の移動を確保するカーシェアリングなどの仕組みについても考えていく必要がある。そして、これらの活動をマネジメントする地元住民や企業を中心とした組織のあり方についても検討する必要がある。

これらの活動を通じて、この地域が、最終的に目指していくべきことは、表面的な日本ではなく、日本人の普通の生活を海外の人に理解してもらい、そこから、地域の人の自負や愛着を醸成して、さらなる地域づくりの原動力にしていくことであると考えている。

委員：この地域の将来像を考える上では、この地域の枠の中だけではなく、隣接する部分を一体的に考えていくことが必要である。ハード面だけでなく、利用する人たちとの関係性、瀬田や南草津、エリア内の住宅地の人が利用しているということを踏まえて、丘陵部を中心とした都市エリアとして考える必要がある。

また、瀬田や南草津、田上などの住民との関係、その存在を無視しては、びわこ文化公園都市は成長しないと思う。こうした公園都市は、色々な人が関わることで成長してものだと思うが、今までは、人々の関わりや活動というものは、プログラムされてこなかったのではないか。瀬田、南草津、田上などの住民や、大学との関係を認識することが、まず前提として重要である。

その上で、どのように管理するかというよりも、ステークホルダーの参加によって、この地域をどのように運営、利用していくかという点を、考えていくことが重要である。そのためには、参加型プログラムの展開が必要であり、それにより、日常生活の延長として、自分たちのエリアとして、この地域を使っていくことが重要である。

そのプログラムをつくるのは、行政ではないと思う。美術館サポーターの会や、森の風音のようなNPO、学生サークルや地域住民など、様々な人がここに関わって、育てていくことが重要である。例えば、里山の管理などでも、地域の人達が参加して管理していくことが考えられる。

これらの参加型プログラムを可能にするマネジメントの仕組みをつくっていくことが重要である。日常的な利用、運用をマネジメントすること、諸団体の連絡調整を行い、連携していくための体制づくりが必要であり、普段からの情報共有が求められる。こうした、連携体制をつくることが、制度の見えない壁を超えていくことにつながると考える。

委員：利用者サイドからの提言として、美術館サポーター会の会員に意見を求めて、まとめた点についてお話したい。

「人が集まってこそ文化が生まれる」と、兵庫県美術館館長の蓑豊氏はおっしゃったが、私たちサポーター会も、同じ考えである。何とか、人が集まる場所にしていけないかということが大きな課題だと感じている。様々な人が集まり、市民の発想によって活用していくことで、新しいタイプの文化を発信していくことができると考える。

そのためには、まず、「文化ゾーン」という硬い呼び名を変えてはどうか。例えば、「文化の森」といった親しみやすい呼び名に変えることが考えられる。

次に、アクセスの問題への取組が必要である。バス路線を公園内に乗り入れて、施設の前まで来るようにするべきである。具体的には、彫刻の道から東大津、滋賀医大前を通り、南草津駅に至る巡回路線を通すことが考えられる。また、環境への影響に配慮して、公園内を巡回する電動カーを設置することを検討していただきたい。また、現行バスは、学生を主な利用者としており、土日の便数が少ないため、これについても見直す必要がある。

西駐車場の有効活用についても検討する必要がある。現在、大型バスの駐車スペースは、北駐車場にあるが、道が狭くて使いにくいいため、西駐車場を大型バスの駐車場にしてはどうか。道路標識の充実も必要である。バス停から美術館までの行き方が分からない人も多く、改善が求められる。

各施設の連携がなされていないことも課題である。施設間の協議会をつくり、連携を図っていく必要がある。また、それぞれが、どういうことをしているか、掲示する施設も必要である。

人を集めるには、定期的にイベントを開催することが考えられる。屋外美術ビエンナーレ、野外コンサートなどを、継続的に実施することが大切である。ウォークイベントとして、乳がんに関するピンクリボンウォークなどを行うことも考えられる。

休憩所の設置も検討していただきたい。現在、西駐車場の近くに東屋があるが、機能していないので、文化ゾーンの中央に屋根のある休憩所があるとよい。また、食の空間、レストランやカフェテリアの設置も必要である。

ハンディを持つ人のための駐車場は、許可証を持つ人のみが見えるように、法制化していただきたい。これについては、県レベルでの取組が必要である。現在、佐賀県や長崎県など、22の自治体で法制化されているので、滋賀県が23番目になるように取組んでほしい。

それから、図書館の休館日は、週1日にしていただきたい。現在は、月曜、火曜が休館日だが、文化ゾーンの利用者を増やしていくためには、1日にする必要がある。

最後に、美術館については、小中学生が、学校団体として、一度は美術館に訪れるシステムを検討してほしい。また、現在、常設展については小中学生と県内在住の65才以上などは無料となっているが、これに加えて、高校生と県外の高齢者も無料としてほしい。

委員：一県民としての視点から、お話ししたいと思う。びわこ文化公園について、インターネットで検索してみたところ、様々な面白い催し物などの情報があった。こうした情報が、一般の人に、あまり伝わっていないのではないかと思う。びわこ文化公園都市の範囲についても、一般の人は、文化施設のある所から医大周辺くらいまでをエリアとして

認識しているのではないだろうか。

私自身も、瀬田、田上に住んできたが、子育てをしていた時には、このエリアを有効に活用していた。インターネットでも、びわこ文化公園を散歩していたら、こんなことがあったという記事がよくみられる。先日も、行って見たのだが、以前よりも小さいお子さんが多く、楽しそうな光景がみられた。指定管理者になってから、随分、状況が良くなったと思う。

このような楽しいことがたくさんある、ということ、どのように広報していくかが課題である。現在、各施設の広報は、それぞれ別に行っているが、一緒に広報していく方法を考えていく必要がある。例えば、それぞれのホームページに互いの情報を掲載することなどが考えられる。

また、交通アクセスの問題は、すぐには解決することが難しいと思うが、私たちの施設でも駐車場が不足しているため、共通で使える駐車場の設置を検討していただきたい。そこから、各施設へのアクセスは、ポップな外観の電気自動車を走らせてはどうか。

それぞれの施設の機能は、十分に発揮されていると思うが、それらをつなぐものがないということは、大きな課題である。せっかくの機会なので、この委員会を出発点として、全体をマネジメントする組織の立ち上げを検討していく必要があると考える。

委員：委員の皆さんのお話の中で、様々な課題が出されたが、それぞれ、ごもつともな意見と感じた。これらの課題解決に向けた展望として、時間軸を意識して取組んでいく必要があると感じた。今すぐ、やる必要があること、また出来ることもあれば、そうではないこともあるので、とりまとめの際は、その点を考慮する必要がある。

前回の委員会で、びわこ文化公園都市に多額の投資をしてきたとお話したが、概算すると、建造物だけで 262 億円を超え、時価にすると 300 から 400 億円と考えられる。これだけの投資をしてきた場所は多くはないため、この地域の持つ資源をさらに活かすことは、県全体からみても重要な課題であると考えている。

委員長：将来像というよりも、将来像を考えるための枠組みについてお話したい。

まず、基本認識として、びわこ文化公園都市は、県全体の中でも中心的な機能を果たしており、今後さらに発展する可能性があること、その際の視点として、文化公園都市としての魅力を高めるとともに、アクセス性を向上する必要があること、また、この地域へのさらなる投資に対する県民の支持を得るためには、その整備が県全体にとって有効であることを明確に示す必要があること、があげられる。

魅力の向上については、時間軸を考慮することが重要である。短期的な施策と中長期的な施策に分けて検討する必要がある。アクセスの向上についても、今すぐ取組むべきことと、将来を見据えて考えるべきことがある。

魅力の向上に関しては、短期的施策としては、利用者目線に立った施設運用、施設間の連携の強化が考えられる。また、この地域全体としての広報が欠けているため、「びわこ文化公園都市」としての広報を強化する必要がある。

中長期的施策としては、まず、新たな施設、機能の導入について、導入空間も含めて検討することがあげられる。また、地区内における機能配置の再検討、および対象範囲

をどこまで広げるかについても検討が必要である。周辺地域の活用検討を踏まえて、範囲を見直す必要があると考える。

アクセスに関しては、現在、この地域では、道路運送法第4条に基づく路線バスが走っているが、採算性は低い状態である。短期的施策としては、バスの増便を求めるだけでなく、利用者の確保を含めて、持続可能なシステムを考えていく必要がある。また、歩行環境の改善やバリアフリー対策も必要である。駐車場についても、量を増やすだけでなく、どこに配置して、どのように運用していくかという視点が重要である。

滋賀県は自動車交通が発達した地域であるが、将来的にもそうであるとは限らない。中長期的には、低炭素社会を踏まえて、環境負荷の少ない交通システムを検討していく必要がある。地区内の交通システムについては、自転車を活用してもよいし、もう少し高度なものも考えられる。また、周辺の高速道路を有効に活用するための道路整備も重要である。これらを含めて、新たな交通システムの導入を検討していく必要がある。

(欠席委員意見について事務局朗読)

事務局：将来像として考えたことをお書きします。

まずお願いですが、当初は立命館大学は“びわこ文化公園都市”構想には入っていなかったということですが、まずは、立命館大学をこのメンバーに加えてほしいと思います。

さらに隣接する大企業であるパナソニックさん等も巻き込んで、この地区全体としてびわこ文化公園都市を活性化することが必要ではないかと思います。もちろん南草津を包含する草津市等とも協力をお願いしたいと思います。

もちろん、小生などはウォーキングでの移動を推奨しますが、たとえば南草津の駅や立命館大学、龍谷大学等の加盟団体の入り口近くに駐輪場を設けてもらい、そこにレンタル自転車をおいてもらって（できれば寄付していただいて）、そこから美術館等への移動を考えていくことにより移動を容易にして流動性を確保できればと思います。

また、今年12月11日（日）に南草津駅で“みなくさまつり”が、開催されますが、それと連動して加盟団体や自治体でのイベント等を行ったり、立命館大学と龍谷大学が同時期にイベントを行い、シャトルバスで移動を確保してもらう等のことをすればかなり、びわこ文化公園都市周辺の流動性が出てくると思います。

また、各団体のインフォメーション場所に美術館等のチラシを置くとかということも有効ではないでしょうか？

各団体の門や入り口近くに着替え室やトイレなどのツアー基点を設置し、そこから滋賀医科大学さんとか美術館、龍谷大学さんへのサイクリングへ出発してもらうというのも良いのでは。

立命館大学では“スポーツ健康コミュニティー”ということで立命館大学とその周辺に皆様がスポーツと健康を柱にコミュニティーを作っていこうと考えております。このような構想にも、歩いてあるいはサイクリングで回れる距離の各団体と協力してやって行ければと考えています。

(3) 意見交換

委員長：委員の皆さんより、多くの有用なご意見が出されたが、これに関して、事務局より、

何かご意見があれば、お願いしたい。

事務局：様々な具体的なご意見をいただき、ありがたく感じている。従前より、個別の課題については聞いてきたが、文化公園都市の維持管理や運営を強化していく上での共通の課題として整理していく必要があると考える。資料6でも、検討事項として、課題解決の方向性とその方策、新しい価値創造の方向性とその方策、などをあげているが、本日いただいたご意見を全体の課題として整理し、新しい価値創造に繋げていきたいと考える。

短期と中長期に分けて考えるというお話があったが、短期的な課題については、すぐにでも取組めるものもあると思うが、どのように取組んでいくかを考える必要がある。この検討委員会は第5回で終わることになっているが、継続的に課題に取り組んでいくための仕組みが必要である。

もうひとつは、課題に取り組むにあたっては、予算的に厳しい面もあるため、まずはソフト面から始めて、ハード面につながっていくように進めていきたいと考える。どのようにすれば取組が可能かについて、事務局としても整理したい。

委員長：皆さんのご意見をまとめさせていただこうと思うが、個別の施設の課題については、場所を変えて議論する必要があると思うので、ひとまず横に置いておきたい。

今日のご意見をまとめると、ひとつは、今、文化公園都市が持っている機能を、今後、いかに維持していくか、あるいは、今後どういう機能を重視して地域競争力を高めていくかという視点があげられる。医療ツーリズムや庶民の生活の良さを発信するといった点も、それに含まれる。

もうひとつは、組織づくりや参加型の仕組み、地域を活用していくためのソフト施策など、様々な表現があるが、この地域の運用の改善に関する意見があげられていた。

3つ目は、交通アクセスの向上に関すること、これは個別の施設へのアクセスだけでなく、地域全体へのアクセスの向上が指摘されていたと思う。

4つ目は、将来ビジョンの対象範囲をどのように考えるかという点である。これについては、今回のビジョン検討のアウトプットとして必要かどうかを確認する必要がある。範囲の問題について、事務局としての考えを聞きたい。

事務局：今回の検討会では、資料において赤枠で示した範囲を前提として、関連する地域を位置づけていただきたいと考えている。また、今後、具体的な構想の段階では、範囲を見直すこともあると考えている。

委員長：それでは、議論に移りたいと思うが、まず、課題や方向性をまとめる際のグループ分けについて、先ほどあげた3から4の課題に対して、それぞれ短期的、中長期的な取組があるといったまとめ方でよいだろうか。あるいは、他のまとめ方がよいかなどについて、ご意見を聞きたい。

委員：短期的な課題については、敢えてこの場で議論する必要はないのではないかと短期

的なことについては、課題が明確なので、それぞれ独自に取組めばよいと思う。それよりも、見通しのついていない中長期的部分をどう構想するかが重要だと考える。

範囲の線引きの問題に関しては、実態としては、これまでのお話を聴いていても、文化ゾーンと滋賀医大のエリアが、議論の中心になっている。施設の間をつなぐというお話も出ていたが、つないだとしても、人が来るかという問題がある。範囲を広げるというより、現在の範囲が必要なのかということを感じている。例えば、東側のゾーンは、一般的な住宅地であり、びわこ文化公園都市のエリアに入れる必要はないと思う。

また、立命館大学と龍谷大学については、この地域の中での性格づけが、他の施設とは違っている。多くの学生がこの地域に来ているが、学生たちは、他の利用者とは、元々、目的が異なっている。地域とのつながりをつくっている学生もいるが、学生の全てが、地域とつながっているわけではない。元々、性格が違うので、そこをひっくるめて議論するというのは、無理があるのではないかと感じる。

大学や医療機関、文化機関などを含めて、大きな構造としてこの地域の構想を考えるのか、あるいはこの地域を活性化させるために、利用のあり方について議論するのかによって、議論の方向性が違ってくると思うので、それは、どちらかに決めていただいた方がよいのではないか。

委員：時間的なスケールだけでなく、空間的なスケールで、もう少し考えてみてはどうか。佐藤委員が仰ったような大きな基盤になる空間と、利用者サイドにたったミクロな部分、運営と密接に関連した部分という、二つの空間スケールが重なりあっているのので、そこは分けて議論した方がよいと思う。私は、この二つの要素は、どちらも必要だと思う。

委員：住民サイドから考えると、意見があったように、文化ゾーンと医大の部分だけが、びわこ文化公園都市としてイメージされていると思う。青山地区の住民には、文化公園都市に居住しているという意識は、おそらくないのではないか。

委員：私たちは、県と一緒に立命館大学を誘致した立場になるわけだが、誘致した以上は、大学と地域は運命共同体だと考えている。大学生に、このまちで何を学んでもらうかということや、大学と一体としてまちをつくるということも考えてきた。しかしながら、立命館大学に、現在、開けられない門があるということも事実である。それは、地域と大学との関係で、そうなっている。また、学生寮をつくるという話に対しては、地域の反対があるということも事実である。

そもそも、この場所は何を目指してきたのか、という疑問もあると思うが、この地域は、様々なものの受け皿となって、走りながら、まちをつくってきたという面がある。大学も含めて、お隣同士としてのあり方を考えていくこと、このエリアを形成するコミュニティという観点から考えていく必要があると思う。今あるものを活かして、大学のあるまちだからこそ、何かが生まれるということがあってほしいと思う。門が開かないといった問題もあるが、小さな取組から、そういうことも解消していくのではないだろうか。

エリアに関しては、広げることも、狭くすることもできると思うが、まずは、この範

困で考えてみてはどうかと思う。図書館の利用をみても、大津市と草津市の人が圧倒的に多い。そのため、ここで何かが動くと、大津市と草津市にとっても、何かが生まれてくると思うので、まずは、このエリアで考えてはどうか。

委員：何代か前の近代美術館の館長が、このエリアは滋賀県の応接間だということを仰ったのだが、それではいけないと思う。先ほど意見があったように地域の住民をひっくるめて全体を考えていく必要があるし、住民参加型のイベントに取り組むのであれば、この地域の住民を無視しては、成り立たない。周辺地域を含めて考えていく必要があると思う。

委員：この検討会は、法人、機関の集まりになっているので、地域住民のためということであれば、青山地区等の自治会長、本学であれば、看護学科や留学生の寮があり、地域に住んでいる教職員もいるので、そうした人たちの意見を聞いて、考えた方がよいのではないか。この検討会は、機関の代表の集まりなので、機関としての意見が中心にならざるを得ない。

委員長：びわこ文化公園都市に関連する市民、県民は、この地域の範囲だけではないと思う。この場に、自治会長等に集まってもらったとしても、まとまらないので、資料7にあるように、中間報告に対して意見を募集するという形になる。この場だけの議論ではなくて、広く県民の意見を聞くことは重要である。

事務局：今後、この地域に関して連絡協議会を続けていくとした場合、どういう方に参加を呼びかけていけばよいかという点も課題である。

委員：それに関しては、ターゲットを絞って議論する必要があるのではないか。県民全体と考えると、有効な議論にはならないと思う。誰をターゲットにしていくのか、決める必要がある。

委員長：私たちは、組織の代表と利用者の代表の集まりではあるが、代表としての立場と、それぞれの知見に基づいて意見を出していただいて、方向性を示せばよいと思う。

委員：それぞれの組織のニーズを取り入れるのか、それとも地域住民のニーズを取り入れるのかによって、議論の方向性は大きく違ってくるのではないか。

事務局：地域住民の方には、こだわりを持った形で、この地域に関わってほしいと考えている。また、この地域の魅力を向上していくことで、幅広い県民に来てもらうことも必要であり、両方をにらんだ検討が必要だと思う。利用者の目線からみた場合は、瀬田、南草津、田上等のエリアが関連する地域になってくると考えている。

委員長：対象範囲の枠組みについて、もう少し詰めて議論した方がよいか。それとも、事務

局からの提案に沿って進めていってもよいか。

委員：事務局から、範囲を示してもらい、それを前提に議論するということがよいのではないか。

委員長：先ほど、短期的な課題の議論は不要という意見もあったが、私は、短期的な小さな工夫なども議論した方がよいと思う。両方の議論がないと、例えば交通アクセスにしても、軌道系のシステムを入れれば、便利になるが、すぐに出来ることではないので、短期的な取組も盛り込んでいった方がよいと思う。

大学との関係については、交通機関の維持には、やはり利用者の数が重要なので、3大学があることの意味は大きい。他の施設の利用者とは、性質が異なっているが、交通機関の利用者という意味では、同列に考えることができる。

委員：私も佐藤委員の意見に賛成で、短期的課題も長期的課題も、また、地域住民のことも県民全体のことも含め、全てを議論するということでは、総花的になってしまうと思う。

委員：今日は、フリーに議論してもらったということだったので、色々なご意見が出てきたと思う。地域にとっての課題と各機関にとっての課題があったので、そこについては、事務局で整理してもらいたい。その上で、共通の課題、あるいはコンセプト的な部分を考える必要があると思う。例えば、エコロジーのまちであるとか、自然環境を活かすといった形で、一定の合意ができればよいと思う。

委員長：若干、結論を急ぎすぎたかもしれないが、今日は、それぞれの考え、率直なご意見をいただくことができた。事務局でとりまとめて、方向を整理してもらった上で、それに基づいて議論を進めていきたいと思う。こういう場で何回か議論しただけで、まとまるとは思っていないが、こういう場もないと、短期的な課題解決も動いていかないと思う。最終的には、こうした様々な意見があったが、全体としてはこういう方向性という形で、とりまとめていただきたい。

事務局：本日は、様々な重要なご意見をいただいたと認識しているので、しっかり整理したいと思う。次回については、12月中旬を目途に、日程調整を行いたい。

(終了)